
青空の向こう

歩得夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空の向こう

【Nコード】

N2079B

【作者名】

歩得夢

【あらすじ】

世間でいう天才、葉上はすばらしい才能の持ち主。しかし、自分が賢いがために何に対しても上から目線。そんな性格が玉に傷の葉上に1通の挑戦状ともとれる手紙が…。果たして葉上は犯人をみつけだすことができるのか。またその犯人の意図とは…。

t h e g e n i u s c h e a t e d b y g o d (前書き)

更新は不定期になると思います。誤字などには注意をしますが、誤りがあるかもしれませんが悪しからずお願いします。

t h e g e n i u s c h e a t e d b y g o d

つまらない。全くつまらない世の中。この時制、人なんていつ死ぬかも分からないのに自分は大丈夫なんとかなるとかって思っている。なぜだ。なぜこいつらと同じ次元で生きなければならない。

「よってこのときのXの値は？えーっと村山までいったから後ろ葉上答えろ。」

「はい。答えは15です。」

「えっ？いや、違うぞ。（これ答えが間違ってるなんてこと…ないよな。）」

「そうですか。すみません。分かりません。」

「お、おう。そうか。まあ葉上も分からない問題はあるよな。うん。ちゃんと認めて偉いな。」

「葉上、いいか。この場合、Xを移項させて○でくくるんだ。だからXは $(3a - 12b + 5)$ になるんだ。分かったか？」

「それは分かりましたが、それは先生の質問の意図と少し違いがあるのではないでしょうか？先生はさっき、Xの値とおっしゃいましたね？しかしこの答えでは値に関してではなくXの等式に関しての答えになってしまっているのではないのでしょうか。なので僕はXを完全に解いて答えを出したのですが、やはり間違いだったのでしょうか？」

他の生徒がくすくすと笑い始めた。

「あ、いや、間違ってる…間違ってるよ。先生が悪かったね。うん。葉上くんが言うことが正しいよ。でも、この問題のXはちょっと解けないんじゃないかな。どうやって考えたんだい？ちよっとノートを見せて…ってこれまさか積分法？」

一瞬教室内が氷ついた。

生徒の中には積分という名を聞いたことがあるもの、全く知らないものと様々だったが、葉上が凄いことをしたということを生徒全員が肌で感じていた。

葉上の名が学校中に轟くにはあまり時間はかからなかった。5月の中旬には学校中の誰もが葉上を存在を認知していた。そんなある日、葉上のもとへ一通の手紙が届いた。

拝啓

葉上陽様へ

葉上様のご賢明であると存じ上げ次のような仕事をしていただけますでしょうか。1・ご通いになられている三山中学の数学の桂木という教師の退職

2・同じく教頭、校長の退職

3・三山中学校の伊豆半島への移転

4・移転後の生徒人数150人以上の在籍

5・島の『はなれおじい』という者以外大人（満20歳以上の者）の撤去。

6・己が教師という存在になる

7・己の両親を消す

以上の仕事ですので順序正しく成し遂げていって下さい。

※期間内に出来なかった場合はノルマ不達成として少々の罰は受けることになりますので、注意して下さい。

「ふ、ふざけるな！自分の親を殺せだど！？」

送り先を見ると教育委員会付属暗解部と書かれていた。

何が暗解部だ！どこのどいつだか知らんが俺を不機嫌にさせた罪は大きいぞ。葉上は心の中に激しい憎悪を覚えた。こいつは桂木や教頭、校長を嫌っている？いや違う。こいつは教頭や校長はただの脅しのために書いているだけだ。

本当は桂木を嫌っているやつ。

しかし、手紙の書き方からしてただの不良じゃなく少し頭が切れるやつ。

そこで葉上は一つ引っ掛かることに気付いた。両親を消せというのは脅しのためだとわかるが、学校を移転や教師になれというのは書く必要がないんじゃないのか？さらに『はなれおじい』というのは調べればすぐに本当にいるのが分かってしまう。それを調べさせて完璧に信じさせようとしているのか？だとしたら少しではなくなかなかの秀才だ。

「おもしろい！絶対に探し出してみせる！」

その翌日から葉上の犯人探しは始まった。

恐らく俺のことを妬んでいる輩は少なくはないだろう。

とするとこのヒントだけで犯人を探し出すのは無理に近いが、同じクラスかよく俺のクラスに来ている奴である可能性は高い。必ず俺の反応を期待して近づいてくるはずだ。

そうになると俺の表情や行動をより気にしている奴ということになる。少し気にかけてみるか。

そうして葉上は自分の周りを探っていくことにしたのだった。

違う、こいつは俺に気があるだけだ。

こいつも違う。俺にがんをとばしたいだけの単細胞だ。

結局、表情だけでは得られるものはほとんどなかった。

もしかすると俺に近付いて反応を見ているということもかんがえられる。

そう考えたとき一人の生徒が思い浮かんだ。それは最近になって妙に俺に近付きだした緑山という男だ。

いつも何かに怯えている印象を持っていた。頭はきれる方で俺の次ぐらいに位置すると思われる。

可能性はかなり高いな。俺は緑山にポイントを絞って観察することにした。

「お、おはよう葉上くん。」

いつもの通りだ。

「ああ。」

いつものように冷静を装うなんて俺にとっちゃ造作もないことだ。

2話

「あのさ。昨日の数学の予習した？」

「したか。」

「この問題難しくない？わかった？」

「これか？」

笑わせるな。この程度の問題をお前が解けないはずはない。

何のフェイクか知らんが、こいつが犯人だという線は濃くなったな。

「あつ、そっかあ……。まあ分かってたけどね。」

「あ？」

何をいつている、こいつ。

なるほど、こうして怒らせて反応を見てやがるんだなあ。その手には乗らん。

一限目の始まりのチャイムが鳴った。

授業のときは俺と緑山は席が離れていて俺より後ろ側に緑山がいる。だから後ろから様子を見てやがるんだろうが、俺はいつもとなんら変わらない行動をする。

一限目が終わり。緑山はまた俺の所によって来た。

「葉上くんって授業受けてるときいつもつまらなそうだね。」

こいつは。いつもはこんなにお喋りじゃないだろ、お前は。

「実際つまらない。」

「そっかあ。まあ分からないでもないよ。」

そんな感じで馬鹿みたいにいつもよりよく喋る緑山の話相手をしなから授業は進み昼休みに入った。

「葉上くん。今日はお弁当、屋上で食べない？」

なんと緑山はそんなことをいいはじめた。

「どうしてだ。」

そんなことをして反応を楽しんでいるのか。

「ちょっとここじゃ言えないことがあって…」

こいつは何を言っている。自分が犯人だと言っているようなものだぞ。

「……………わかった。」

固く拳を握りしめ俺たちは屋上に向かった。

そして屋上には幸い人はいなかった。

「どうゆうつもりだ!!」

俺は我慢しきれず、緑山の胸ぐらを掴んでいた。

「おかど違いだよ。葉山君。」

「ふざけるな!!」

お前しか考えられないだろ!？」

「もし俺が犯人ならこんな真似はしないよ。」

そのとき俺は自分でもそう思った。

もし俺でもこんな真似はどう考えてもしない。

「なら、なぜここへ呼んだ？」

「君に協力したくてね。」

「ふ、ふざけるな!俺にはお前の力など必要ない。」

「そうかな。べつにいいけど、このままだったら確実に葉山君負けるよ。」

「どうゆうことだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2079b/>

青空の向こう

2011年1月26日12時34分発行